

1 文(文章)で解答する設問の答案については、次のA項の加点要素の合計から次のB項・C項の減点要素の合計を引いた得点をその設問の得点とします。ただし最低点は0点としマイナスの得点はつけません。

A 以下の採点基準では、模範解答をいくつかの要素に分割し加点要素とします。答案中にその加点要素に相当する部分があれば、その加点要素に配点された得点を与えます。
b ある加点要素は、その加点要素に配点された得点か0点で採点することを原則とします。たとえば5点配点された加点要素であれば5点か0点で採点することを原則とします。その場合それぞれの採点基準の中に明記されていません。ただし、その加点要素中の部分点を認める場合もあります。その場合それぞれの採点基準の中に明記されていません。

c ある要素に加点するか否かが、他の要素と無関係に決まる場合と、他の要素との関係で決まる場合があります。前者の場合は、その要素を単独採点(独立採点)すると言いその旨必ず明記されています。後者の場合は、他の要素との関係について以下の採点基準で具体的に指示されています。

d 解答通りという条件がある場合はいかなる部分点も認めません。

B a 答案中に大きな誤読と判定される内容(語句)などがある場合は、その内容(語句)を減点要素として示されている場合もあります。
b 加点要素でも減点要素でもない部分もありえます。その部分は加点も減点もしません。

C 次に該当するものは、答案の形式上の不備として、一箇所につき1点の減点要素とします。
a 誤字。漢字などの文字の明らかな誤りは誤字とします。

b 脱字。

c 文末の句点の脱落。

*字数指定のない場合、句点の脱落は誤字とし1点の減点とします。

d その他不適切と判断せざるをえない箇所。

e 不適切な文末処理。設問の問い方に対応していない形で答案の文末を結んでいない場合は、適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備による減点要素とします。

たとえば「:とはどういうことか?」という問いに体言で結んでいないものなどは適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備とします。

また、理由が問われているのに、「から」「ので」などで結んでいないものなども適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備と見ます。

*ただし、「ことである」などの表現も「こと」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また、「からである。」などの表現も「から」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。

また文末の表現を問わない場合もありますが、その場合はその都度明記されています。

2 日本語の表現として不適切なものは程度に応じて減点します。

3 次の各項に該当するものは、部分点の要素があっても、その設問の得点を0点とします。

a 答案が解答欄の欄外にはみ出しているもの。

b 一行の解答欄に二行以上書いた場合もその設問の得点を0点とします。

c 字数指定のある設問で、字数をオーバーしたもの。

d 答案の文章が最後まで完結していないもの。

4 古文あるいは漢文の訳を記述する設問の場合も以上に準じますが、文末の句点や文末の処理あるいは答案の完結にこだわらなくともよい場合はその都度明記されています。

一 (評論)

問一 各2点。解答通り。

- a 留意 b 埋没 c シュウチョウ ρ 貪欲(慾) e 含蓄
f 涸(枯)渴 g カイリ h サクシユ i チョウラク

問二 各4点。解答通り。

- (1) || エ(2) || イ(3) || オ

問三 1 2点

A 4点

B 3点

(模範解答)

自然資源の涸渴が社会の存続の危機に直結していた伝統的社会では自然は神聖視され、その利

C 2点

D 3点

用に関する社会規範は世代を超えて受け継がれる文化伝統になっていたということ。

A 本文の「自然資源の枯(涸)渴はただちに、伝統的社会的存続自体を危うくする危険を内在している」に対応している。「伝統(的)社会」では「自然資源」が社会の存続を支えていた、あるいは両者は密接に関わっていたということが説明されておればよい。

B 「自然の神聖」という表現は、本文の後の方にある。ここは類似した説明を広く許容してよい。「聖なる自然」「自然の聖性」「自然への畏敬(畏怖)」「自然を崇める」「自然(それ自体)を信仰の対象とする」というような説明は全てOK。

C 本文の「自然資源の利用にかんする社会的規範をつくり出してきた」に対応する。ともかく、自然資源の利用に関して社会的(な)規範が存在するということが答案から読み取れればよい。

D 本文の「世代からつぎの世代に継承されていった」に対応する。ここもほぼ同意と判断できれば広く許容してよい。「(文化)伝統」という語がない場合は1点減点し2点とする。

問四 1 0点

A 5点

B 5点

(模範解答) 自然環境と生活とが不可分な伝統社会の年長者は、自然に関する経験に基づいた深い知識を持

っていたから。

A 伝統社会の生活が自然(環境)と密接に関わりながら営まれていたという説明が読み取れればよい。単に自然に関する知識に触れているだけの答案は2点とする。

B 年長者がどのような知識に通じていたかの説明。最重要ポイントは「経験に基づいた」という説明。何に関する知識なのか明示されていない場合は3点とする。説明が曖昧な場合は適宜減点する。

問五 14点

A 4点

B 4点

C 6点

(模範解答) キリスト教は天からの賜物である自然に対する人間の優位に論理的根拠を与えたため、自然環

境の破壊と搾取、そのための科学研究が容認され、伝統社会が持っていた聖なる自然への敬意が

否定されていたということ。

A 「キリスト教が自然に対する人間の優位に論理的根拠を与えた」ということが説明されておれば3点。「論理的」が無ければ2点。「天からの賜物である(自然)」という説明に1点与える。

B (a) 「(キリスト教による) 科学研究の容認」に2点、(b) 「(科学研究が) 自然(環境) の破壊と搾取につながる」という説明に2点、(a) (b) 合わせて4点という目安で採点する。説明が曖昧な場合は 適宜減点する。

C まず(a) 「伝統(的) 社会が持っていた自然観」の「否定」あるいは「喪失」といった内容があれば3点与える。次に(b) 伝統的社会的自然観が「(神) 聖なる自然への敬意(畏敬)」といった内容の説明に3点与える。例によって、説明が曖昧な場合は適宜減点する。

問六 12点

A 2点

B 3点

C 2点

D 2点

(模範解答) 数学的法則に従って 意志を持たずに機械的に動く自然を生産手段として 人間に経済的利益を

E 3点

もたらす 抑圧、搾取の対象と見なすこと。

※ A・Bが自然科学的な自然観の説明、C・D・Eが自然科学的自然観に依拠する人間の自然への対し方の説明となっている。

A 自然科学が自然を「数学的法則」に従って動くものととらえていることの説明があれば2点与える。

B 自然は「機械的に動く」という説明があれば2点与える。本文には「自らの意志をもたず、受動的な存在にすぎない」とあるので、「意志をもたず」の代わりに「受動的」を使っている答案も許容してよい。この「意志をもたず」あるいは「受動的」に1点与える。

C 自然を「生産手段」と考えるという内容が読み取れる答案には2点与える。

D 自然が「経済的利益の追求」の手段にされるという内容が読み取れる答案には2点与える。

※ 本文には「すべてが生産手段として、経済活動の手段を果たすものとなっていった」とある。この記述をほぼそのまま答案に使っている場合は、C2点+D1点とする。Dは「経済活動」だけでは1点で、「経済的利益の追求」とあれば2点になるということ。説明が曖昧な場合はC・D合わせて考え、適宜減点する。

E 自然が「抑圧・搾取」の対象になるということが読み取れる答案には3点与える。「抑圧」「搾取」のいずれか一つだけの場合は2点とする。

【二】 古文『玉勝間』

問一 ① 傍線部について、わかりやすく現代語訳せよ。 【8点】

〔該当傍線部〕 A2はかばかしくB1師につきてわざと学問すともあらず、C1何と志すこともなく、D1からのやまとのくさぐさの書を、E2あるにまかせ、うるにまかせて、F1古き近きをも言はず、何くれと読みける

〔模範解答〕 A2しっかりB1先生について格別に学問するといふのでもなく、C1何と目標にするともなく、D1中国や日本の様々な書物を、

E2あるのにまかせ、手に入れるのにまかせて、F1古い新しいの区別もなく、あれこれと読んだ

【ポイント】

A【2点】 はかばかしく ↓ しっかり

※「本格的に・格別に」などでもよい。「大袈裟に・大仰に」などは×。

※「しっかりした・本格的な・特別な」など連体修飾語になっている場合は【1点】。

B【1点】 師につきてわざと学問すともあらず、 ↓ 先生について格別に学問するといふのでもなく、

※「先生」は「師」のままでもよい。

※「格別に」は「特別に」・「ことごとくに」・「わざわざ」などでもよい。

※「といふのでもなく」は「といふことでもなく」というわけでもなく「などでもよい」。

C【1点】 何と志すこともなく、 ↓ 何と目標にすることもなく、

※「何か志すわけでもなく」などでもよい。

D【1点】 からのやまとのくさぐさの書を、 ↓ 中国や日本の様々な書物を、

※「中国」が「唐」のままであったり、「日本」が「大和」のままである場合は×。

※「様々な」は「いろいろな・種々の」などでもよい。

E【2点】 あるにまかせ、うるにまかせて、 ↓ あるのにまかせ、手に入れるのにまかせて、

※「ある」は「手もとにある・家にある」などでもよい。

※「手に入る」は「手に入れる・入手する・得る」などでもよい。

F【1点】 古き近きをも言はず、何くれと読みける ↓ 古い新しいの区別もなく、あれこれと読んだ

※「区別もなく」は「問わず・関係なく」などでもよい。

※「あれこれと」は「何でも・いろいろと」などでもよい。

問一 ② 傍線部について、わかりやすく現代語訳せよ。 【8点】

〔該当傍線部〕 A2十一の年、父におくれしにあはせて、B2家のなりはひをさへ失ひたりしほどにて、C1母なりし人のおもむけにて、D1薬師のわざをならひ、E1また、そのために、世の常の儒学をもせむF1とてなりけり。

〔模範解答〕 A2十一歳の年に、父に先立たれた上に、B2家の商売までも失ってしまった時期で、C1母であった人の意向で、D1医者 of 技術を習い、E1また、そのために、世間で一般に学ぶ儒学も学ぼうF1として上京したのであった。

〔ポイント〕

A【2点】 十一の年、父におくれしにあはせて、 ↓ 十一歳の年に、父に先立たれた上に、

※「十一歳の年に、父に先立たれた」の意があれば【1点】、さらに「上に」の意味があれば【2点】。

※「父に先立たれた」は「父を亡くした・父に死なれた」などでもよい。

※「上に」は、添加の意が明らかであれば「父に先立たれた。さらに」のような表現でもよい。「ために・同時に」などは×。

B【2点】 家のなりはひをさへ失ひたりしほどにて、 ↓ 家の商売までも失ってしまった時期で、

※左の五箇所が、全てできていれば【2点】。四箇所できていれば【1点】。できているのが三個以下の場合は×。

※「家の商売」は「家の生業・家業」でもよい。「なりわい」のままは×。

※「までも」は「さえ。さえも」でもよい。「すら・も」は×。

※「失ってしまった」は「失った」でもよい。「た」の訳がない場合は×。

※「頃」は「時・時期・時分」などでもよい。「時」を意味する表現がない場合は×。

※「で」は「であって」でもよい。「で・であって」以外は×。

C【1点】 母なりし人のおもむけにて、 ↓ 母であった人の意向で、

※「母であった人」は「母・母親・母である人」では×。

※「意向」は「はからい」でもよい。

※「で」は「によって・に従って」などでもよい。

D【1点】 薬師のわざをならひ、 ↓ 医者 of 技術を習い、

※「医者」は「薬剤師」では×。「薬師」のままも×。

※「技術」は「業・仕事・すること・術」でもよい。「薬師のわざ」「で」「医術・医業」と訳していてもよいとする。

E【1点】 また、そのために、世の常の儒学をもせむ ↓ また、そのために、世間で一般に学ぶ儒学も学ぼう

※「また、そのために」がない場合は×。

※「世間で一般に学ぶ」は「世」世間（の常識である）でもよいとする。

※「学ぼう」は「しよぼう」では×。

F【1点】 とてなりけり。 ↓ として上京したのであった

※Eが×の場合は得点できない。ただし、誤字等で×になっている場合は得点できる。

※「として」は「という」ことでよい。

※「上京した」は「都へ行った・京へ出た」などでもよい。

問一 ③ 傍線部について、わかりやすく現代語訳せよ。 【8点】

「該当傍線部」 A2今の世の歌詠みの思へるむねは、B1大かた心になはず、C2その歌のさまも、をかしからずおぼえけれど、D1そのかみ同じ心なる友はなかりければ、E1「こかしこの会など」に出でまじらひつつF1詠みありきり。

「模範解答」 A2当代の歌人の考えていることは、B1大体納得がいかず、C2その詠みぶりも、面白くなく感じたけれど、D1当代は同じ考えの友はいなかったので、E1あちらこちらの歌会などに出で交際しつつF1歌を詠んで回った。

「ポイント」

A【2点】今の世の歌詠みの思へるむねは、 ↓ 当代の歌人の考えていることは、

※「当代」は「現在・最近・近頃・現代」などでもよく、「今の世」のままでもよい。

※「歌人」は「歌詠み」のままでもよい。

※「考えている」は「思っている」でもよい。「ている」がない場合は×。

※「こと」は「ことの意味・ことの趣旨」などでもよい。「こと」がない「意味・趣旨」などは×。「胸中」では×。「旨」のままも×。

B【1点】大かた心になはず、 ↓ 大体納得がいかず、

※「大体」は「ほとんど・大概」でもよい。

※「納得がいかず」は「気に入らず・（私の）心に合わず」でもよい。

C【2点】その歌のさまも、をかしからずおぼえけれど、 ↓ その詠みぶりも、面白くなく感じたけれど、

※左の項目に従って採点し、全てできていれば【2点】。×が一つあれば【1点】。×が二つ以上ある場合は×。

※Aに「当代の歌人」の意があれば「その」はなくてもよく、「こ」で「その」に「当代の歌人の」の意を補っていてもよい。

※「詠みぶり」は「詠み方・歌の様子」でもよい。

※「面白くなく」は「すばらしくない・風情がない・賞すべきではない・すぐれていない」などでもよい。

また、打消表現は「面白いとは感じられない」のように後方にあってもよい。

※「感じた」は「感じられた・思われた」でもよい。「思った」は×。

D【1点】そのかみ同じ心なる友はなかりければ、 ↓ 当代は同じ考えの友はいなかったので、

※「当時は」は「その頃は・その折は・昔は・以前は・かつては」などでもよい。これができていないと×。

※「同じ考えの」は「同じ考え出ある・同じ気持ちの・気持ちが通じる」などでもよい。「同じ心の・同じ心である」は×。

※「ので」は「ため・から」などでもよい。原因・理由で訳していない場合は×。

E【1点】「こかしこの会など」に出でまじらひつつ ↓ あちらこちらの歌会などに出で交際しつつ

※「あちらこちら」は「あちこち・方々」ほづほづ（「でもよい」）あちゆる・すすべの「などは×

※「会」は「歌会・歌の会・歌を詠む会」など「歌」に関わる「会・集まり」となっていないなければならない。

※「交際」は「交流」でもよい。

※「しつづ」は「しながら・して・し」などでもよい。

F【1点】 詠みありきけり。 ↓ **F1** 歌を詠んで回った。

※「歌を」はなくてもよしとする。

※「回った」の意がない場合は×。「歩いた」は×。

問一 ④ 傍線部について、わかりやすく現代語訳せよ。 【8点】

〔該当傍線部〕 **A1** 師と頼むべき人も **B1** なかりしほどに、 **C1** いかで **D1** 古のまことのむねを考へ出で (**C**) む **E1** と思ふ志深かりしにあはせて、かの『冠辞考』を得て、 **F1** この大人を慕ふ心、 **G1** 日にそへて **H1** せちなりし

〔模範解答〕 **A1** 先生として頼れる人も **B1** いなかった頃に、 **C1** どうやって **D1** 古代の真実について考えていこ (**C**) うか **E1** と思ふ気持ちが深かったが、まさにその折に、あの『冠辞考』を入手して、 **F1** 真淵先生を慕う心が、 **G1** 日増しに **H1** 切実であった

〔ポイント〕

A【1点】 師と頼むべき人も ↓ 先生として頼れる人も

※「先生」は「師」のままでもよい。

※「頼る」は「頼む・あてにする」でもよい。

※ possible の意がない場合は×。

B【1点】 なかりしほどに、 ↓ いなかった頃に、

※「頃」は「時・時分・折」などでもよい。

※過去表現（～した）がない場合は×。

C【1点】 いかで ～ む ↓ どうやって ～ うか

※「なんとかして ～ しよう・どうにかして ～ したい」でもよい。

D【1点】 古のまことのむねを考へ出で ↓ 古代の真実について考えていこ

※「古代の真実」は、これと同意で文意が通ずる表現であれば、「昔の本当のこと・上代の真理」などでもよい。

※「古代の和歌の真実・古代の文学の真実・古代の精神の真実・古代の言葉（詞）の真実」などとなっている。

※「むね」が「旨・趣旨・主旨」になっている場合は文意が通じないので×。

※「考えていく」は「考える・究明する・研究する」などでもよい。

E【1点】 と思ふ志深かりしにあはせて、かの『冠辞考』を得て、 ↓ と思ふ気持ちが深かったが、まさにその折に、あの『冠辞考』を入手して、

※「&」と思ふ気持ちが深かった時に、『冠辞考』を手に入れて「の意があればよい。

※過去表現（～した）がない場合は×。

※「その折（時）に」の意がない場合は×。「合はせて」のままは×。

F【1点】 この大人を慕ふ心、 ↓ 真淵先生を慕う心が、

※「大人」が「真淵・賀茂真淵」と具体的にないならば×。

G【1点】 日にそへて ↓ 日増しに
※「日々・毎日に・日に日に」などでもよい。

H【1点】 せちなりし ↓ 切実であった
※「切実になった・強くなった・大きくなった・甚だしくなった・しきりにした・ひたすらした」などでもよい。

※過去表現（した）がない場合は×。

問二 二重傍線部を文法的に説明せよ。 【7点】

〔該当傍線部〕 学べるにあらず

〔模範解答〕 A1「学べ」は、バ行四段活用動詞「学ぶ」の已然形。 B2「る」は、存続の助動詞「り」の連体形。 C2「に」は、断定の助動詞「な

り」の連用形。 D1「あら」は、ラ行変格活用動詞「あり」の未然形。 E1「ず」は、打消の助動詞「ず」の終止形。

〔ポイント〕

※書き方は、モニター解答①のように別々に書き分けていても、モニター解答②③のように「+」を使っ
てつなげて説明していてもよいこととする。

動詞の意味（学ぶ・ある）の有無は不問とするが、大きく違っている場合は×とする。

A【1点】 「学べ」は、バ行四段活用動詞「学ぶ」の已然形。

※「已然形」は「命令形」でもよい。

※活用の行・活用の種類・品詞・活用形が全てあっていて 【1点】。

※「学べ」は、「と」、基本形「学ぶ」はなくてもよい。

B【2点】 「る」は、存続の助動詞「り」の連体形。

※「存続」は「完了」でもよい。

※意味・品詞・基本形「り」・活用形が全てあっていて 【2点】。

※「る」は、「は」はなくてもよい。

C【2点】 「に」は、断定の助動詞「なり」の連用形。

※意味・品詞・基本形「なり」・活用形が全てあっていて 【2点】。

※「に」は、「は」はなくてもよい。

D【1点】 「あら」は、ラ行変格活用動詞「あり」の未然形。

※「ラ行変格活用」が「ラ変」となっている場合は×。

※「動詞」は「補助動詞」でもよしとする。

※活用の行・活用の種類・品詞・活用形が全てあっていて 【1点】。

※「あら」は、「と」、基本形「あり」はなくてもよい。

E【1点】 「ず」は、打消の助動詞「ず」の終止形。

※意味・品詞・活用形が全てあっていて 【1点】。

※「ず」は、「と」、基本形「ず」はなくてもよい。

問三 ア 傍線部について、筆者はどのように受け止めたのか、本文の内容に即して説明せよ。【1点】

〔該当傍線部〕 契沖といひし人の説

〔模範解答〕 A3非常に優れていると感じ、B3契沖の説を知ったことで、和歌に関する良し悪しなども理解できるようになったと思っていたが、

C2真淵の『冠辞考』に出会って、D3契沖の『万葉集』に関する説は不十分な点が多かったと思うようになった。

〔ポイント〕

A【3点】 非常に優れていると感じ、

※「優れている」と受け止めたことがわかればよい。「すばらしい」などでもよい。

B【3点】 契沖の説を知ったことで、和歌に関する良し悪しなども理解できるようになったと思っていたが、

※「契沖の説を知ったことで」はなくてもよい。

※「和歌に関する良し悪しを知った」の意があればよい。

C【2点】 真淵の『冠辞考』に出会って、

※Dが0点の場合は得点できない。ただし、誤字等で0点になっている場合は得点できる。

※「真淵の」がない場合は【1点】。

※「に出会って」は「を知って・を読んで」などでもよい。

D【3点】 契沖の『万葉集』に関する説は不十分な点が多かったと思うようになった。

※「『万葉集』に関する説は不十分」と受け止めたことがわかればよい。

※「契沖の」はなくてもよい。

※「説」は「論」などでもよい。

※「不十分」は「正しくない・誤っていた」などでもよい。

問三 イ 傍線部について、筆者はどのように受け止めたのか、本文の内容に即して説明せよ。 【10点】

【該当傍線部】 『冠辞考』

【模範解答】 A1始めはB1考えたこともない内容ばかりで、C2理解できず、全く信じる気になれなかったが、D1訳があるのだろうと思ってE1再読すると、見直す度にF1なるほどと感じる点が増え、G1遂に古代の精神や言葉についてはH2『冠辞考』に書かれているとおりだと悟った。

【ポイント】

A【1点】 始めは

※BもCも0点の場合は得点できない。ただし、誤字等で0点になっている場合は得点できる。

※「初めは・一通り読んだ時は」などでもよい。

B【1点】 考えたこともない内容ばかり

※「考えたこともない」「は」「思い及ばない」などでもよい。「深遠な・深い考えで」などがある場合はx。

C【2点】 理解できず、全く信じる気になれなかったが、

※「全く理解できない(信じられない)」「の意があればよい。

※「全く」の意がない場合や、「あまり・それほど」などになっている場合は【1点】。

D【1点】 訳があるのだろうと思って

※Eがxの場合は得点できない。ただし、誤字等でxになっている場合は得点できる。

※「訳」は「読まれる理由・支持される理由」などでもよい。

E【1点】 再読すると、見直す度に

※FもIもxの場合は得点できない。ただし、誤字等でxになっている場合は得点できる。

※「再読する・読み返す」の意があればよい。

F【1点】 なるほどと感じる点が増え、

※「なるほどと感じ・納得がいき」の意があればよい。

G【1点】 遂に古代の精神や言葉については

※Hがxの場合は得点できない。ただし、誤字等でxになっている場合は得点できる。

※「遂に」はなくてもよい。

※「古代の」は「上代の・昔の・古風な」などでもよい。

※「精神や言葉」は「心・詞」のままでもよしとする。

H【2点】 『冠辞考』に書かれているとおりだと悟った。

※「『冠辞考』に」はなくてもよい。

※「書かれているとおりだと悟った」は「信じるようになった」でもよい。

【三】 漢文(60点)

問一 各2点×3＝計6点

a もし

b かつ

c もとより

※カタカナは× 0点

※a「も」、b「か」、c「もと」のように、送り仮名がないものは× 0点

※b「しばらく」、c「かたく」は× 0点

問二 6点

【模範解答例】やむを得ず (A 1点)

その非難に反論するのならば、 (B 3点)

こちらの姓名は隠しておくほうがよい。 (C 2点)

◎採点のポイント

A「已むを得ずして」の訳 1点

※「やむをえず」でよい。

※「避けることができず」「しかたなく」も可。

B「之を言はば」の解釈 3点

※設問の条件である「言」の対象…2点

単に「非難に」でも可とする。

「非難(攻撃)」の要素がなく、「外部の人間に」のみは△1点

「外人」「外国人」としているものは×

※「之を言はば」そのものの解釈…1点

「反論する」「議論する」の注あり。

「若し」と呼応しているので仮定表現にする。「反論するのならば」などは○。

「何か言うのであれば」「自分の意見を言うときは」も可。

仮定表現になっていないものは△減点1点。

C「須らく其の姓名を隠すべくして可なり」の解釈 2点

※「須らく」べくして可なり」の訳は「～する必要がある」「～すべきである」「～するほうがよい」など可。

※「其の姓名」は「自分(こちら)の姓名」だが、単に「姓名は」も可とする。

※「其の」を「その人の」のようにしているものは△減点1点。

問三 10点

【模範解答例】

- 徳行を以て知られた顔回のように (A 2点)
無我の境地に達してでもない限り、 (B 3点)
普通の人間は (C 2点)
自分のほうが正しく人が間違っていると思うことから逃れられない (D 3点)
ということ。 (E 不問)

◎採点のポイント

A 「顔子の」について 2点

※ 「顔回(顔淵)のように」があれば……1点

「顔子」のままになっていても可とする。

※注の「徳行を以て知られた」あるいは「徳のある」「人徳のある」のような表現があつて……1点

B 「苟しくも未だ……無我のごときと能はざれば」の要素 3点

※ 「無我の境地に達してでもない限り」「かりにも無我になれないのであれば」など可。

※ ABをまとめて下に続く仮定条件が必要。「〜(できない)ので」のように確定条件になっているものは×。

C 「Dの主体(顔回に対比するもの)」の補い 2点

※ 「普通の人間は」「凡庸な人間は」「顔回のようにではない人間は」など可。

※ 「我々は」「人は」も認める。

D 「未だ己を是として人を非とするを免れず」の要素 3点

※ 「自分(のほう)が正しく」……1点

「人(相手のほう)が間違っている」……1点

「〜と思うことから逃れられない」……1点

※ 「逃れられない」は「免れることができない」も可。

E文末の「〜ということ」の有無については不問。

問四 8点

【模範解答例】

- 徳に優れた人間でさえ、 (A 2点)
人を非難・攻撃したりすることはあるのだから、 (B 2点)
まして、不完全な人間であれば、 (C 2点)
なおさら人を非難・攻撃してしまうものだ (D 2点)
ということ。 (E 不問)

◎採点のポイント

A 傍線部の「盛徳者すら」の要素 2点

※ 「特に優れた人間」「人徳のある立派な人」など○。

※ 「〜でさえ」は「〜でも」「〜とはいえ」「〜ですら」も可。

B 傍線部「猶ほ免れざるをや」の内容 2点

※ 「人を」はなくて可。

※「非難」「攻撃」は、どちらか一つでも可。

C 「盛徳者」に対比されるもの 2点

※「不安全な人間(であれば)」「つまらない人間は」「普通の人間は」「徳の乏しい人間は」も○。

※「そうでなければ」は△1点

D Cであれば「なおさら」どうだというのか 2点

※「なおさら」……1点

※「人を非難・攻撃してしまうものだ」「非難したりすることはある」など……1点

※「非難」「攻撃」は、どちらか一つでも可。

E文末の「〜ということ」の有無については不問。

問五 6点

【模範解答例】 当に終身忘れざるべきを知るは、 (A 3点)

聞くこと勿きに如かずと。 (B 3点)

◎採点のポイント

※ABどちらかで0点になるような大きなミスがあっても、もう片方の配点は生きる。

※すべて平仮名になっているものは×

※読み順が返り点どおりではなく間違っているものは×

※読み順が間違っていないければ部分的に平仮名であってもよいが読み方が間違っていたら1点減点。

A 「当に終身忘れざるべきを知るは」 3点

※「当に〜べき」の再読文字を読めていないものは×

※「ざる」「べき」が平仮名でないものは×

※「忘れざるべきことを」でも可。

※「忘れざるべきを知ること」は「でも可」。

※「忘れ」の未然形、「ざる」の連体形、「べき」の連体形、「知る」の連体形の活用形のミスは×マイナス3点

※前半末は「〜は」が必要。ないものは×マイナス3点

B 「聞くこと勿きに如かずと」 3点

※「聞くこと」は「こと」がなくとも可。

※「勿(な)きに如(し)かず」は比較の型。「聞くこと」が漢字であれば「なきにしかず」とひらがなになっても○とする。

※「」がついていないが、会話を閉じるところなので、末尾に「と。」を入れる。ないものはマイナス1点とする

問六 24点

【模範解答例】

- 人が自分を非難しても、耳を傾けないことだ。(A 4点)
人はそれぞれに異なる。(B 2点)
人が、誰しも自分が正しく人が正しくないと考えることを免れないのは、自分の考えに固執するからである。(C 3点)
ゆえに、自己の修養に努めることで、(D 3点)
人を非難しないようにならなければならぬ。(E 4点)
(F 4点)
聞かないほうがよいことは、聞かないほうがよいのである。(G 4点)

◎採点のポイント

※それぞれについては、おおむねそのようなことが言えていれば、得点させることとする。
※内容の取り違えがあれば、それぞれのポイントの点の中で×あるいは減点する。

A要素 4点

※「人が自分を非難しても」…2点、「耳を傾けないことだ」…2点とする。
※それぞれについては、「人が異論を唱えてく」非難・攻撃してきても「聞かないようにしてほしい」「聞き入れるな」のように、表現はさまざまで可。

B要素 2点

※「人はそれぞれ異なる」ことが言えていればよい。
※「人の気質や好悪はく」のように具体的でもよい。
※「くから、どちらが正しいかの議論はむだである」などはあってもよいが、なくてもよい。

C要素 3点

※解答例は、傍線部2の「未だ己を是として人を非とするを免れず」を取ったが、「毀す無き能はず(人を非難・攻撃しないことができない)」を用いて、「人がどうしても人を非難してしまうのは」のようにしてもよい。

D要素 3点

※「其所」は、「己を是とする」感情、考え。
※「自分の考えに固執する」の注あり。そのまま用いてよい。

E要素 4点

※「自己の修養を努め(ること)」 「自分の人格を磨き」 「学問によって自己を納め」などで可

F要素 4点

※「人を非難することがないようにしなければならない」ということ。
※そのような「人間にならなければならない」「くなることが大切だ」のようでもよい。

G要素 4点

※冒頭のAのポイントと重なるところである。
※「呂蒙正が言ったようにく」のように始めてもよい。
※呂蒙正の語を具体的にまとめてあってもよいが、加点はしない。
※「聞かないほうがよいことは」を「聞きたくないことは」としているものは、マイナス2点とする。
※「聞かないほうがよい」は「聞かないようにすべきだ」でもよい。